

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：25406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720234

研究課題名(和文)消滅の危機に瀕する「渡来語」の緊急調査

研究課題名(英文)An Urgent investigation of &lt;TORAIGO&gt; which is the verge of disappearance

研究代表者

小川 俊輔 (OGAWA, Shunsuke)

県立広島大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：70509158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：1. 「渡来語」(16世紀以降に西欧から輸入された外来語。キリスト教用語と一般の外来語を含む)の全国分布を明らかにするために、全国971のカトリック教会に向けて調査票を郵送し、回答・返送をお願いした。調査結果は電子化のうえ、公開される予定である。

2. 「渡来語」の受容史を叙述するための手法の1つとして、「歴史社会地理言語学」を提唱した。この方法でoratioオラシヨ、Jesusイエズス、paraisoパライズなど複数の語について事例研究を行なった。

3. 南米ボリビア多民族国のサンフアン日本人移住地を訪問調査し、「渡来語」を含む移住者の信仰生活(言語)史を記述した。

研究成果の概要(英文)：1) <<TORAIGO>> are loanwords which have been imported from Western Europe since the 16th century. They contain both specifically Christian words and more general loan words. In order to clarify the distribution of <<TORAIGO>> around Japan, questionnaires were mailed to the 971 Catholic Churches across the country. The results of the survey will be digitized and published in the near future.

2) As a method to describe the history of the acceptance of <<TORAIGO>>, "Historical Social Geolinguistics" was proposed and practiced. The words ORATIO, JESUS, and PARAIISO were analyzed and described by the method.

3) There are many Japanese migrants in settlements named "San Juan" in the Plurinational State of Bolivia. The histories of the religious and linguistic life of these migrants are recorded and described.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言学 言語地理学 地理言語学 日本語学 キリシタン語彙 キリスト教用語 渡来語 日系南米移民

#### 1. 研究開始当初の背景

2003年4月以来、研究代表者は「渡来語」の受容史に関する調査・研究を行ってきた。「渡来語」とは16世紀以降に西欧から輸入された外来語のことを指す。キリスト教用語と一般の外来語が含まれる。

2003年4月から2005年3月までの2年間は、長崎県およびその周辺地域181地点を現地調査し、その成果を『長崎県言語地図』などにまとめた。2005年4月から2007年3月までの2年間は、九州全域119地点を現地調査した。2003年4月から2007年3月までの4年間で合計300地点を調査したことになる。その後、2010年3月まで、調査結果のデータベース化と言語地図作成および解釈研究を行ってきた。

以上の調査・研究の結果、九州地方における「渡来語」の受容史について、ある程度、明らかにされた。そこで、次の課題は全国における「渡来語」の現状を調査・記述することであると考へ、本研究を構想した。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は「渡来語」の全国緊急調査とデータベースの構築である。各地で受容され土着した「渡来語」は、今日、「伝統的方言語彙」となっている。しかし、記録されぬまま消滅の危機に瀕しており、早急な調査・記述が必要である。

#### 3. 研究の方法

研究方法の概要は次のとおりである。

調査票の作成

調査票の印刷、製本、郵送

返送された調査票の整理、電子化およびお礼状の送付

未返送の方への催促状の送付

調査結果に基づく論文または口頭発表

調査結果の公表

#### 4. 研究成果

本研究の目的は、日本全域における「渡来語」の実態を記録することであった。「渡来語」とは16世紀以降に西欧から輸入された外来語のことである。そこにはキリスト教用語と一般の外来語が含まれる。調査方法は、全国に1,000弱あるカトリック教会に調査票を郵送し、回答・返送をお願いする、というものであった。研究計画を立案した時点では、研究初年度の2011年夏頃までに調査票を郵送する予定であった。しかし、調査票を郵送したのは2014年3月であった。これは、2011年3月11日に東日本大震災が起きたためである。

そもそも「郵送調査」というのは、不躱な方法である。それを、震災直後に、被災地に向けて発送することは、研究倫理上、許されないことだと考へた。研究代表者は、広島にあって、時折マスコミからもたらされる被災地の状況を見聞きし、いつになっても、

「調査票を発送するには早すぎる」との思いを抱き続けていた。しかし、一方で、全国に向けて郵送調査をすることは、科研費の申請の際に記した公約である。国民の血税を以て配当された研究費を適切に執行することも、研究倫理上、重要であると思われた。悩みに悩み、3年間の研究期間が終了する、まさにその最終月である2014年3月、意を決して発送した。発送先は、北は北海道から南は沖縄まで、全国のカトリック教会所在地971カ所である。2014年5月現在、日々、全国から調査票が返送されてきている。津波で壊滅的な被害を受けた東北地方太平洋沿岸地域からも、返送があった。調査票には、「是非とも、私たちの言葉を記録して残してください」とあった。涙が出る思いであった。「研究に役立ててほしい」と、当地の教会史(非売品の記念誌)を送ってくださった方もあった。地域の特産品をご恵贈くださった方もあった。当初の計画では、返送された調査票のすべてのデータを電子化を終えることになっていた。この約束は、必ず守る。2014年の9月までに電子化を終えたいと考えている。

調査票の発送を遅らせたものの、3年間を無為に過ごしたわけではない。よりよい調査票の作成に向けた調査・研究を継続し、調査票の回収率を上げるために、カトリック教会との関係作りにも力を入れた。実際に、カトリック教会の複数の神父様から、この調査に対する有益な助言と温かいお励ましをいただいた。他方、返送された調査票を電子化した後には、これを言語地図などのかたちでまとめ、解釈研究、語誌研究を行なうことが期待される。その方法論の探索にも意を用いた。最終的に、これまでの歴史言語学、社会言語学、言語地理学の方法を組み合わせた「歴史社会地理言語学」という方法を提唱し、実践した。結果として、この方面での成果が、本課題研究の中心となった。以下では、年度ごとに研究成果の概要を示す。

#### 【平成23年度の主な研究成果(4点)】

《1. 調査票の試作》本研究の根幹をなす調査票が完成した。試作した調査票を研究会で発表・紹介し、参加者からの助言を踏まえて改訂を加えた。

《2. ポリビア多民族国サンファン日本人移住地における聞き取り調査の実施》戦前・戦後を通じ、長崎、福岡から多くのカトリック信者が新天地を求めて南米へ渡った。研究代表者は、2012年の2月14日から29日まで、サンファン日本人移住地での聞き取り調査を実施した。調査の結果、移住者は数多くの「渡来語」(特にキリスト教用語)を記憶しており、一部の語は彼らのアイデンティティと深く結びついていることが明らかとなった。

《3. 九州地方における「天国」の受容史の

記述》掲題の事柄について、日本語を対象とする国内最大規模の学会「日本語学会」の機関誌『日本語の研究』に「九州地方における「天国」の受容史 宗教差、地域差、場面差」と題する論文が掲載された。要旨は以下のとおりである。

(要旨)九州地方における「天国」の受容の実態を明らかにするため、九州地方全域 300 地点において現地調査を行った。調査によって得られた資料から言語地図を描き、考察を行なったところ、「天国」の受容には、宗教差、地域差、場面差のあることが分かった。宗教差については、カトリックと神道の信徒が「天国」を受容しているのに対し、浄土真宗の信徒は「天国」を受容しない傾向がある。彼らは仏教語である「浄土」を持つゆえに、「天国」を受容しない傾向をみせたと推測される。地域差については、宮崎・鹿児島では「天国」の受容が進んでいるのに対し、長崎では遅れている。場面差については、大人が子どもに話しかける場面では「天国」が使用されやすいのに対し、仏教色の強い場面では「天国」が使用されにくい。

《4 .Oratio オラシヨの受容にかんする歴史社会地理言語史の記述》渡来語 Oratio オラシヨは「祈り・祈祷文」を意味するキリスト教用語である。この語の歴史社会地理言語史を「キリシタン語彙の歴史社会地理言語学 oratio オラシヨを例にして」と題する論文にまとめ、陣内正敬ほか編『外来語研究の新展開』(おうふう)に発表した。要旨は以下のとおりである。

(要旨)「オラシヨ」が意味する概念については、時代的な変遷があった。「オラシヨ」の元となったラテン語 oratio は「祈り」を意味する語であった。しかし、それが外国人宣教師により日本に持ち込まれたとき、「オラシヨ」を唱える主体はキリシタンであったことから、「キリシタンの祈り」という意味で使用された。禁教時代、「オラシヨ」は潜伏キリシタンによって密かに伝承された。幕末維新期には、宣教師の言語戦略によって潜伏キリシタンのオラシヨが利用され、一時、カトリック教会においても「オラシヨ」という語が使用された。この時、「オラシヨ」を唱えていたのはカトリック信者とカクレキリシタンであった。このため、この時代の「オラシヨ」は、「カトリックの祈り」、「カクレキリシタンの祈り」の意味で使用されていたことになる。その後、カトリック指導者が「オラシヨ」を含むラテン語・ポルトガル語由来の伝統的なキリシタン語彙の使用を止めたことにより、昭和になると、「オラシヨ」は次第に「カクレキリシタンの祈り」としてのみ使用されるようになっていった。

次に地域差の観点から見ると、今日、「オラシヨ」は「オラシヨ」「オラシヨ」「ウラシヨ」「オライソ」「モノモノ」「モンジャモンジャ」など、様々な語形を持っている。

語形相互の歴史的先後関係については以下のとおり解釈できる。

まず、「オラシヨ」「ウラシヨ」については前者から後者が生まれたと考えてよいだろう。しかし、「オラシヨ」という語形が「オラシヨ」が変化して生まれたのか、あるいは、キリシタン時代にラテン語 oratio が日本語化するとき(「オラシヨ」を経由せずに)生まれたのかどうかは分からない。

最後にオラシヨの社会的位置、価値について整理しよう。「祈り」が果たす役割の大きさについては、キリシタンに限らず、あらゆる宗教・信者に共通のものである。しかし、禁教という社会状況下において「オラシヨ」が担った役割はとりわけ大きなものだったらしい。その後、潜伏キリシタンの伝えた「オラシヨ」は、幕末維新期に来日した宣教師に利用される。しかし、長い年月に渡って密かに口伝されたことによって生じた訛り・変容については、注意深く修正された。昭和の時代になり、「オラシヨ」は芸術家によって繰り返し利用され、また地方自治体・国家によって保護され、記録・保存される存在となった。

他方、キリシタンの子孫にあたるポリビア移住者は、現地語であるスペイン語 oración オラシオンとの邂逅により、日本で耳にしていた「オラシヨ」の歴史性をおのずから悟り、自らのアイデンティティを見つめ直すこととなった。

#### 【平成 24 年度の主な研究成果(2点)】

《1 .全国郵送調査のための事前準備の進展》この調査では、日本各地のカトリック教会に調査票をお届けし、ご返送いただくことにした。このため、カトリック教会の協力を得られるかどうか、調査票の回収率に大きな影響を持つ。そこで、平成 24 年度はカトリック教会の関係者との協力関係を構築することに意を注ぎ、その成果があった。

《2 . VIIth Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics における「天国」および「paraiso」にかんする研究発表》2012 年 7 月にウーンで開催された標記の国際会議において、「天国」および「paraiso」の歴史について研究発表を行った。今日の「天国」の一般化・繁用は、外来文化の日本的受容—たとえばキリスト教信者ではない新郎新婦がキリスト教会式の結婚式を挙げること—の様態を示す典型的な事例として解釈できると主張した。国際会議における発表の要旨は以下のとおりである。

(要旨) 'Tengoku' is the Japanese word for 'Paradise' or 'Heaven', originally a Christian term. The aim of this paper is to elucidate the acceptance history of 'Tengoku' in Japan. In conclusion, the following can be pointed out: 1) Differences in religion, region, speech partners and

situation have an influence for the acceptance and use of the term 'Tengoku' by elderly people. One of the reasons is 'Tengoku' was originally a Christian term. 2) Young people tend to accept and use 'Tengoku' more than elderly. And 'Tengoku' is used by younger people without it having a Christian meaning. 3) The mechanism that young people accept and use 'Tengoku' is similar to how they accept the wedding ceremony in the Christian-style, necklaces in the form of a cross, and Christmas without any Christian faith.

### 【平成 25 年度の主な研究成果 (3 点)】

《1. 「渡来語」にかんする全国郵送調査の実施》平成 26 年 3 月, 全国 973 のカトリック教会に宛てて調査票 (A4 判 17 頁, 31 項目) を郵送した。平成 26 年 5 月 1 日現在, 各地から調査票が返送されてきており, 順次, データベース化を進めている。

《2. ボリビア多民族国に暮らすキリシタン家族の信仰生活史にかんする記述》キリスト教史を対象とする国内唯一の学会「キリスト教史学会」の機関誌『キリスト教史学』に掲題の内容の論文(「南米に移住した長崎のキリシタン家族 ボリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例」)が掲載された。要旨は以下のとおりである。

(要旨) 19 世紀後半以降, 多くに日本人が海外に移住していった。ハワイやブラジル, カナダ, アメリカなどは, 多くの日本人が移住した国としてよく知られている。他方, 1954 年に始まった南米のボリビアへの移住はあまり知られていない。こんにち, ボリビアには「コロニア・オキナワ」および「コロニア・サンファン」という 2 つの大きな日本人移住地が存在する。「オキナワ」移住地の移住者は, すべて沖縄県出身者である。一方, 「サンファン」には, 沖縄県をのぞく全国各地から移住者がやってきた。そして, その半数は, 長崎県からやってきた人々であった。2010 年 10 月におけるこの移住地の日本人の割合は, 46.4%が長崎県人, 7.4%が福岡県人, 5.1%が北海道人である。

この移住地には, 長崎出身の多くのカトリック信者がいる。彼らの多くは, 16 世紀にカトリックに改宗し, 17 世紀から 19 世紀にかけて, 政府によってキリスト教が禁止された時代に, 隠れキリシタンとしてキリスト教信仰を守った人々の子孫である。

研究代表者は, 2012 年の 2 月 14 日から 29 日にかけてこの移住地を訪問し, 長崎出身のキリスト教信者である移住者に聞き取り調査を行なった。この調査の結果とこの移住地に関する先行研究から, 結論として以下の 4 点を指摘した。

1. 18 世紀末期以降, 長崎のキリスト教信者は, よりよい新しい生活を求めて, 九州地

方内において, 移住を繰り返してきた。多くの長崎のキリスト教信者が「サンファン」に移住した理由の 1 つは, 移住を繰り返した彼らの先祖の歴史にあると思われる。

2. 従来, 海外への移住は経済的理由によっておこなわれると考えられがちであった。しかし, 長崎からサンファンに移住した人々には, 「自由なカトリックの信仰を求める」という宗教的な理由も存在した。

3. サンファンの信者のために, 日本から, 日本語を話せる外国人宣教師と日本人シスターが派遣された。1961 年には煉瓦づくりの教会堂が建設され, イエズス会に所属するマヌエル・フェルナンデス神父が初代サンファンカトリック教会の司祭となった。彼は信者に「太郎神父」と呼ばれ, 愛された。今日でも, 信者の彼に対する尊敬と感謝の念は強い。神父やシスターの献身的な活動は非キリスト教徒からも高く評価され, 尊敬された。

4. 1873 年, 日本政府は切支丹禁制の高札を撤廃した。そして, 半数のカクレキリシタンがカトリック教会に戻り, 神父から洗礼を受けた。しかし, 半数のカクレキリシタンは, 教会に戻らず, 潜伏形態の信仰を続けた。サンファンには, 後者の子孫たちが移住してきており, 彼らは, カトリック教会に通わず, 先祖から受け継がれた「オラショ」と呼ばれる祈禱文を家の中で唱えていた。

《3. Christian <キリスト教信者>にかんする研究》ポルトガル語起源の「キリシタン」と英語起源の「クリスチャン」の接触史について, 歴史社会地理言語学の方法を用いて考察し, 日本語学会中国四国支部 2013 年度大会 (2013 年 10 月 13 日, サテライトキャンパスひろしま) にて発表した。当該発表の要旨は以下のとおりである。

(要旨) 【目的】 <キリスト教信者>を意味する語の, 歴史的, 社会的, 地理的変遷過程を明らかにすること。【方法】以下の調査による。(1) フィールド調査: 2003 年~2005 年にかけて九州地方 300 地点において実施した地理言語学的調査, 2009 年に長崎県・熊本県で実施したカトリック教会の神父と信者を対象とする質問調査, 2012 年に南米のボリビア多民族国サンファン日本人移住地で実施した長崎県出身のカトリック信者に対する文化人類学的調査。(2) 文献調査: 中世末期のキリシタン資料, 幕末明治期のプチジャン版(長崎で編纂・発行)

近現代の各地のカトリック教会史・記念誌。

【結論】カトリック信者が自らのことを<キリスト教信者>という場合, 主に「シンジャ」という語が使われる。但し, 長崎県の五島列島においては, 非キリスト教信者も<キリスト教信者>のことを「シンジャ」と呼称する。この用法は, 五島列島におけるキリシタン隆盛の歴史的・社会的背景から説明できる。長崎・佐賀・熊本のカトリック信者の一部は, 今も自らのことを「キリシタン」と

呼ぶ(「シンジャ」と併用)。この語を使うカトリック信者は、自身を“先祖代々の信仰者である”と認識している。また、彼らは「クリスチャン」を<プロテスタントの信者>の意味で使っている(意味の棲み分け)。他方、仏教徒はカトリック信者とプロテスタント信者とを区別していない。かつては両者をまとめて「クリシタン」と言っていた。現在は「クリスチャン」と呼称するのが一般的である。カトリック教会では、潜伏クリシタン(江戸時代のカクレクリシタン)を先祖に持つ信者のことを「キューシンジャ(旧信者)、それ以外の信者のことを「シンシンジャ(新信者)」と呼ぶ伝統があった。この語は、主に布教者と旧信者の人々が使用する語であった。「旧信者」という語の発生・使用の背景には“殉教・迫害を乗り越えて守り継いだ信仰(者)”に対する敬意、自覚、誇りがある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

小川俊輔、南米に移住した長崎のクリシタン家族 ポリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例、キリスト教史学、査読有、第67集、2013、pp.134-156.

小川俊輔、九州地方における「天国」の受容史 宗教差、地域差、場面差、日本語の研究、査読有、第8巻第2号、2012、pp.1-14.

小川俊輔、日本社会の変容とキリスト教用語、社会言語科学、査読有、第13巻第2号、2011、pp.4-19.

[学会発表](計5件)

小川俊輔、Christian<キリスト教信者>の自称と他称 歴史社会地理言語学の方法による、日本語学会中国四国支部2013年度大会、2013年10月13日、サテライトキャンパスひろしま

小川俊輔、南米に移住した長崎のクリシタン家族 ポリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例、キリスト教史学会、2012年9月15日、福岡女学院大学

小川俊輔、クリシタン語彙の歴史社会地理言語学 oratio オラシヨを例にして、九州方言研究会第34回研究発表会、2012年9月3日、九州地区国立大学九重共同研修所

小川俊輔、Sociolinguistic and geolinguistic study on the acceptance of the term tengoku ('paradise' or 'heaven')

in the Kyushu region of Japan、International Society for Dialectology and Geolinguistics 7th International Congress 2012、2012年7月27日、Austrian academy of science. Vienna

渡来語を対象とする全国郵送調渡来語を対象とする全国郵送調査について、広島・方言研究会、2011年7月9日、県立広島大学

[図書](計5件)

Ogawa, Shunsuke、Sociolinguistic and geolinguistic study on the acceptance of the term tengoku ('paradise' or 'heaven') in the Kyushu region of Japan. In Eveline Wandl-Vogt(eds.): Proceedings of 7th SIDG Congress (Tentative title)、2014 (in press) Praesens Verlag、16頁

小川俊輔、クリシタン文化と方言形成 Jesusの歴史社会地理言語学、小林隆編『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』所収、ひつじ書房、2014 (in press) 26頁

小川俊輔、長崎・天草におけるクリシタン語彙の継承と変容、長崎県世界遺産登録推進室編『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書【論文編】(長崎県文化財調査報告書第210集)』所収、長崎県、2013、pp.428-449

小川俊輔、クリシタン語彙の歴史社会地理言語学 oratio オラシヨを例にして、陣内正敬ほか編『外来語研究の新展開』所収、おうふう、2012、pp.78-96

小川俊輔、九州地方におけるクリシタン語彙の受容史、大石一久編『日本クリシタン墓碑総覧』所収、長崎文献社、2012、pp.455-464

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

小川俊輔(OGAWA, Shunsuke)  
県立広島大学・人間文化学部・准教授  
研究者番号:70509158

##### (2)研究分担者

なし

##### (3)連携研究者

なし